

大学・地域連携推進事業結果概要書（魅力発信事業）
平成 28 年度「まちかど研究室」事業報告

「まちかど研究室」（以下、まち研）では、平成 24 年度からの継続事業として、大学の魅力づくり・情報発信や地域活性化に寄与する事業を積極的に続けている。事業実施 5 年目であった平成 28 年度は、拠点の低稼働率、担い手不足を解決するため、平成 27 年度に全面見直しを図った運営体制「まち研運営委員会」（教職員で構成）を継続して、① 両大学学友会連携イベント、② ゼミ・団体によるプロジェクト、③ 市民向け講座の 3 つを柱とした活動を実施した。両大学の学生、学友会、ゼミ等、これまで以上に多くの学生、教職員によって、大学のもつ専門性や若者らしい感性やアイデアを発揮しながら、中心市街地や柏崎の活性化に寄与すべく、精力的に様々なプロジェクトを実施した。

なお、添付資料として、二大学学友会の合同プロジェクトおよび、7 つのグループによる「まちかど研究室プロジェクト」の活動報告書を提出する。個々の事業のより具体的な活動内容についてはこれらの資料を併せてご参照いただきたい。

1. 「まち研運営委員会」による実施体制

平成 24～26 年度のまちかど研究室においては、主に各大学のそれぞれ一つの研究室／ゼミの学生とその担当教員を中心としたメンバーが年間を通じて、すべてのイベントの計画実施、拠点の管理などを行ってきたが、精力的に様々な活動を展開する一方で、慢性的な人員不足と一部の学生、教員への負担過多、拠点の稼働率の低さが課題となっていた。

これらの課題を解決し、更なる両大学の魅力発信と地域活性化のため、平成 27 年度にまち研の事業の活動体制について全面的な見直しを行った。拠点の運営と活動の実施を切り離し、全体の統括や拠点の維持管理に関しては、二大学の教職員が構成員となる「まち研運営委員会」によって、適宜話し合いを行いながら各活動の管理を行った。2 か月に 1 回程度の打ち合わせや Web 上での予定管理システムの共有などを通じて、各活動の進行状況の把握や調整、地域からの要望についての検討などを行った。平成 28 年度の「まち研運営委員会」の構成員は以下の通りである。

<まち研運営委員会>

委員長	権田恭子	講師（産大）
副委員長	長聡子	准教授（工科大）
委員	布施俊彦	地域連携センター事務室長（産大）
	内山一穂	学務課長（工科大）
	海南李江	地域連携センター事務室係長（産大）
	小池安洋	学務課主任（工科大）

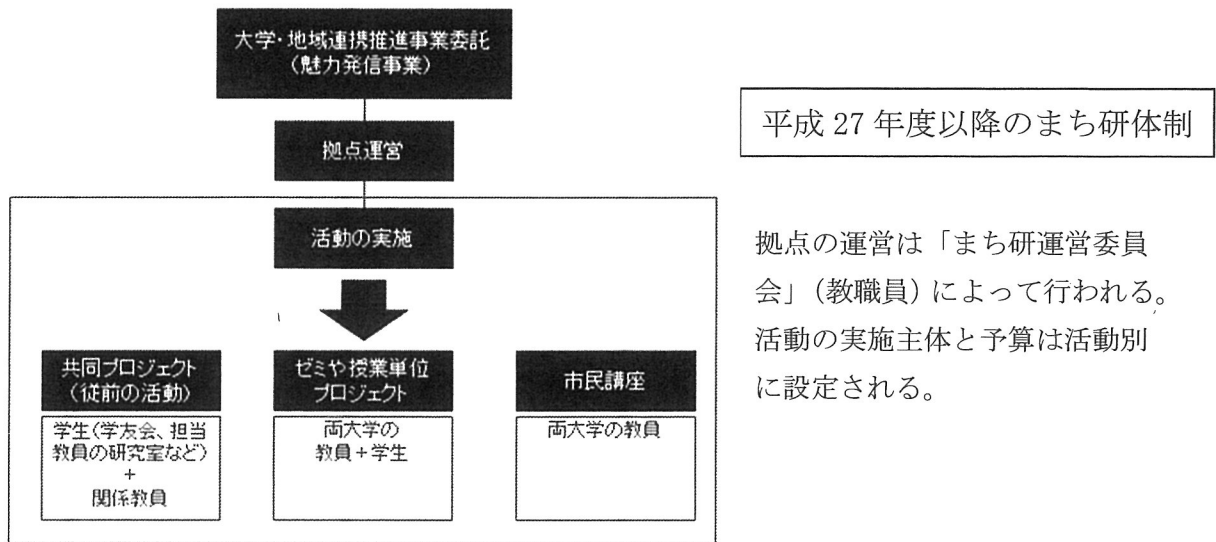


図1 まちかど研究室の事業実施体制

2. 実施結果

(1) 両大学学友会連携イベント (実施報告書参照)

「スタンプラリー&オリエンテーリング@商店街」

昨年度に引き続き、両大学の学友会(当日参加スタッフ 50 名)が共同で主催するイベントを実施した。まちなかの商店街を対象エリアに、小学生の参加する冬の賑わいづくりのための「スタンプラリー&オリエンテーリング」を 11 月 26 日に開催した。駅前～西本町～東本町の店舗・施設を訪れ、各商店街にある 60 店舗・施設の協力のもと、小学生 51 人が参加し、店主らとふれあいながら冬の商店街を歩いて回り、まちなかに活気を与えた。商店街を歩くことで参加した小学生が各店舗や施設、柏崎のまちなかの魅力を知ってもらうことを目指した。

小学生は 3 人一組でスタンプカードを持ち、学生スタッフと一緒に 2 時間で協力店舗・施設を訪れた。各チェックポイントでは店舗・施設にまつわるクイズや課題が出され、店主とのコミュニケーションを楽しみながら、スタンプを集めた。スタンプラリー後はアルフォーレ会議室にて工科大学食の協力で豚汁がふるまわれ、また、上位 5 グループには商店街の協力店などで使用できる地域通貨の「風輪通貨」や協力店舗の商品が送られた。

「風輪通貨」を配布することで、イベントを通じて知った店舗での買い物が楽しめる仕組みにした。参加者へのアンケートでは 98%の児童が「楽しかった」、全児童が「今後もこのようなイベントに参加したい」と回答し、また、協力店舗(店主)へのアンケートでも、好評をいただき、概ね成功であったと言える。



写真1 スタンプラリー&オリエンテーリング@商店街

(2) 各大学がゼミや授業単位で実行するプロジェクト「まち研プロジェクト」
(各団体の実施報告書参照)

少額の活動資金をゼミや授業に補助して、各大学の専門性を活かした「まち研」を利用する活動や研究を実行した。平成28年度は、二大学計7団体の活動・研究を実施した。5月に参加プロジェクトを決定、各団体の目的や学生の興味関心に合わせた多彩な活動が行われた。3月には参加団体による報告会を開催し、情報交換を行った。

① 「商店街の活性化とボランティア活動の促進を目的とした風輪通貨の流通、および風輪米の生産風景のパネル展示」(産大 阿部ゼミナール)

米本位制地域通貨「風輪通貨」の取り組みを、市民に対してパネル展示等を通じて広報し、風輪通貨流通活動に対する市民の認知度をあげることに、そして、ボランティア活動の促進および地元商店への消費者の誘導を目指した。柏崎活性化につながる各種ボランティア活動参加者への風輪通貨を配布した。また、収穫されたお米を使用したお煎餅「たな米」、「風輪」をまち研で店頭販売した。まち研で活動をした学生やイベントに参加した小学生などに「風輪通貨」を配布することで、若い世代が商店街に足を運び、商店街の店舗の魅力を発見する機会を創出した。



写真2 風輪米の生産風景とまち研でのお煎餅の店頭販売

② 「まちかど研究室 Cafe」 (産大 権田ゼミナール)

まち研拠点で学生が運営する Cafe をオープンした。商店街を訪れた方に気軽に立ち寄って飲食、休憩するスペースとともに、市内高校生に放課後の学習スペースを提供することを目指した。12月、2月に10日間、夕方のスペース開放を行い、のべ約130名が利用し、冬の商店街に明かりを灯した。また主に小学生を対象とした季節のイベントを開催した。7月5、7日に「大学生と七夕パーティー」(参加者のべ90名)、10月27日に「大学生とハロウィンパーティー」(参加者59名)を実施し、小学生を中心に多くの方がまち研を訪れ、大学生たちと楽しいひとときを過ごした。



写真3 大学生と七夕パーティー



写真4 大学生とハロウィンパーティー



写真5 まちかど研究室 Café

③ 「柏崎市の地域経済に関する調査・研究」（産大 八木ゼミナール）

「地域経済分析システム（RESAS）」を活用し、2つの調査研究活動を行った。前年度からの継続であるテーマ1「『子育て支援パスポート事業』実施による経済効果の分析」では、柏崎市で独自の「子育て支援パスポート」を導入することを提言し、その経済波及効果を分析した。また、テーマ2「新潟産業大学が地域に及ぼす経済効果」では、新潟産業大学が立地していることによる柏崎市への経済効果、更には同大学が公立化した際の経済効果の拡大について試算した。成果は2月20日の「柏崎に関する研究発表会」ならびに2月21日「インターンシップフォーラム長岡」で報告を行った。



写真6 「柏崎に関する研究発表会」でのプレゼンの様子

④ 「書道とふれあいの会」（産大 書道部）

書道を通じて、異年齢、異文化の方々との交流を目指して活動した。毎月2回まち研で書道体験会やポストカードのプレゼントなどを行い、書道を通じて地域の方との交流を図った。8月6～7日に開催された「ふるさとまつり絵あんどん展」へ出展し、また10月26日には「書道とふれあいの会特別展」として、季節のポストカード・年賀状、布絵制作の講座を開催した。書道部員の技術の向上とともに、地域の方とのコミュニケーション能力も養うことができた。さらには11月30日には産大学内で大筆で字を書く「大字体験会」を実施し、特に留学生が興味をもち参加してくれた。



写真7 「季節のポストカード・年賀状づくり」と「ふるさとまつり絵あんどん展」の様子

⑤ 「まち研を活用した工科大卒業生の生産物販売と廃食用油回収」（工科大 再生可能エネルギー研究同好会）

まち研を拠点として廃食用油回収し、BDF燃料（バイオディーゼル燃料）生成の原料とした。同時に廃食用油回収時に燃料生成時につくられる液肥を使用して卒業生が栽培した野菜、果物の販売（もも、アスパラガス、イチジク、ル・レクチュ、人参）も行い、循環型社会システムのPRにもつなげることができた。廃食用油の回収及び野菜、果物の販売は7月～2月に計6回実施し、野菜や果物は毎回ほぼ完売した。また7月の「ぎおん柏崎まつり」の際には人参の食味アンケートも実施した。



写真8 液肥を利用して栽培した野菜、果物の販売

⑥ 「『ほんちょうマルシェ』への出店」（工科大 長研究室）

東本町フォンジェ向かいの路地で5月から10月の第一土曜日に開催されている「ほんちょうマルシェ」へ工科大・まち研として出店した。子どもの参加の多い9月、10月に、その場で簡単に制作できるクラフトワークショップを開催し、多くの親子連れに体験していただいた。9月は32名、10月は28名の参加者があった。ほんちょうマルシェの賑わいづくりの一役を担ったとともに、まちなかで開催されるイベントに「まち研」として参加することで、まち研や大学のPRにもつながった。



写真9 「ほんちょうマルシェ」への出店の様子

⑦ 「グリーンバード」(工科大 グリーンバード柏崎チーム)

グリーンバードとは、「きれいな街は、人のこころもきれいにする」をコンセプトに誕生した東京原宿・表参道発祥のプロモーションプロジェクトである。平成27年度に全国67番目のチームとして柏崎チームを立ち上げ、まち研周辺の商店街を定期的に清掃する活動を実施した。今年度は「ビーチピクニック」、「柏崎マラソン」といった市内イベントとコラボした企画も実施し、9月～11月の計4回の実施でのべ139名もの参加があり(昨年度に比べて50名増)、清掃活動の拡大とともに市民や参加者同士の交流も得られた。



写真10 グリーンバード柏崎チームの清掃活動

3月8日には「まち研プロジェクト」参加団体の代表が一堂に会し、1年間の活動の報告と意見交換を行った。こうした参加団体間での交流によって、企画同士のコラボレーションが新たに生まれたり、各団体が抱える課題に対しての解決策が見つかったりといった効果もあり、有意義な会となった。



写真 11 「まち研プロジェクト」活動報告会の様子

(3) 市民向け講座

高校生を対象とした入試広報、高齢者を対象とした生涯学習を主な目的とした講座等を想定し、両大学が定期的に市民向けの講座・セミナーをまち研内で実施した。産大、工科大で計3回開催した。昨年度からの継続テーマやはじめてのお酒をテーマにしたものなど、回数こそ少なかったが、多彩な講座を提供できた。告知はチラシ、ポスターの他、『柏崎日報』「催し物」欄への掲載や、FMピッカラでの告知など、地元メディアにご協力いただき、特に社会人向けの講座については集客に効果があった。

①「理想の『家』づくりワークショップ」(工科大)

開催日：11月20日

講師：工科大 黒木宏一准教授

理想の「家」の間取りを自由に描くワークショップを実施した。

福祉関係への就職が決まった学生などが参加した。

②「まち研ビストロ ワインとチーズの夕べ」

(産大)

開催日：12月8日

講師：産大 梅比良眞史教授

参加者：12名(社会人)

フランスワインの生産地やラベルの読み方などを学びながら、6種類のワイン(+α)の試飲を楽しんだ。

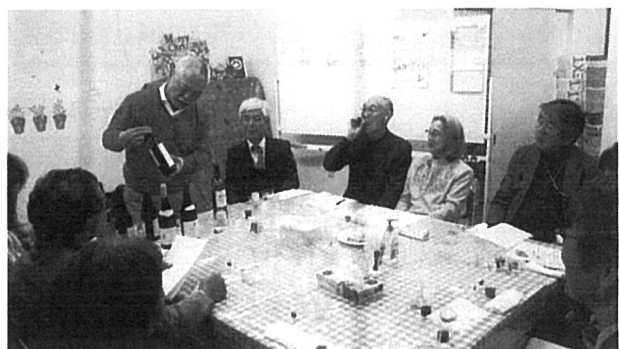


写真 12 「ワインとチーズの夕べ」

③「第3回 中国語サロン」 (産大)

開催日：1月20日

講師：産大 詹秀娟 (センシュウケン) 教授

参加者：20名 (社会人、留学生)

中国、台湾の春節について烏龍茶や台湾のお菓子を飲食しながら楽しく学んだ。



写真13「第3回 中国語サロン」

④「クラシック・タタタタン」 (産大)

開催予定：2月16日

講師：産大 梅澤精教授

単純なリズム《タタタタン》が、ハイドン、ベートーヴェンなどの音楽の中でどう使われて来たのか、作品を実際に聴き (CD)、音楽家についても解説する。

「U・I ターン情報プラザ」での開催を予定していたが、講師の都合で中止となった。

また、上記の3つの柱とある活動以外にも下記の通り多岐にわたって活動を実施した。

(4) えんま市での出店

前年度までと同様、えんま市の開催期間の6月14日と16日の2日間にまち研スペースを活用して祭りに参加した (3日間平日の開催だったため、15日は開店せず)。「たな米」、「ふふ豆」といった大学×地域コラボ商品やドリンクの販売、3Dプリンタのデモンストレーションなどを行った。また、室内では「高柳デザインコンペ」や「大学は美味しい!! フェア」など、二大学における地域連携活動の様子を紹介したパネル展示を行った。



写真14 えんま市への参加の様子

(5) ウィンターイルミネーション

例年実施されているウィンターイルミネーションであるが、今年度も12月初旬～2月中旬に、商店街店主の方々にご協力いただき、産大生、工科大生の9名でニコニコ通り商店街の一部アーケードおよびまち研の室内にイルミネーションを設置した。きらびやかな明かりで、冬の商店街を華やかに照らすことができた。



写真15 ウィンターイルミネーション

(6) まち研のスペース貸し

まち研の拠点を大学生以外の地域の方々にも提供し、様々なまちづくり活動や人々の集う場として活用してもらうため、引き続きスペース貸し事業を実施した。この取り組みによって、地域の方にまち研を身近に感じてもらうこと、地域の方の活動に学生が興味関心を持ち、交流の契機となることなどの意義が挙げられる。今年度は下記のような継続的な使用も目立ち、その他、市民によるビジネス講座の開催、単発で大学内外の団体の打ち合わせや、学生の卒業研究などにも活用され、まち研の稼働率の大幅アップにもつながった。

① 地場産野菜の販売

産大の社会人学生と地域の方の共同企画で、7月～12月の毎週土曜日の午後にはまち研の店頭にて、農薬不使用の地場産野菜の販売を行った。週末の午後の恒例行事として次第にリピーターも増え、まち研の場所や活動を認知してもらう効果もあった。



写真16 地場産野菜の販売の様子

② 小中学生の学習支援事業

柏崎市社会福祉協議会からの働きかけで、経済的困難な小中学生を対象に長期休暇中の学習支援ボランティア事業に取り組んだ。産大秋山教授と同大教職課程学生、柏崎翔洋生徒、一般ボランティアの方が協力して、夏休み、冬休み、春休みで合計29日間実施（3月31日までで計算。春休みは4月4日まで実施）した。4月2日は「U・Iターン情報プラザ」を会場にカレーライスの調理実習と会食を楽しんだ。



写真 17 小中学生学習支援事業の様子

(7) facebook ページによる情報発信

以前から継続して、facebook ページにおいて、まち研での活動を随時情報発信している。各種イベントの告知や活動の中間報告などに有効活用している。

3. 成果と今後の課題

以上が5年目のまち研の活動の概要である。昨年度の運営体制の見直しによって、それまでの3年間とは活動内容も様変わりしたが、今年度は全体としては前年度の取り組みを継承することで、各事業における参加者が各々の課題を少しずつでも改善し、より充実した実施内容になったと評価できる。

そして、今年度の最大の成果は、事業への学生、市民の参加人数、まち研拠点の稼働率が大幅に増加したことが挙げられる。月10回～20回以上は拠点を活用し、最高は10月のべ27件/月を達成した。学生の事業参加数も大きく増加し、二大学計100名以上の学生が各自の興味関心に応じてまち研に関わり、市民の参加状況についても、特に小学生対象のイベントでは50名を超える参加がしばしば見受けられるようになった。仲間と誘い合ったり、情報を発信したり、参加者とコミュニケーションをとったりといった、学生たちの「巻き込み力」が発揮され、共に地域を盛り上げていこうとする機運が高まっていたことがこれらの成果に繋がったと考える。

まち研を様々な団体が活用するようになったことで、拠点使用の日程調整、管理が重要となってくるが、今年度はGoogleカレンダーを活用し、まち研運営委員会の教職員で拠点の使用状況について情報共有を行ったことで、スムーズに日程調整ができた。共通のカレ

ンダーを用いることで、おおよそ「何曜日ほどこの団体が使う傾向がある」など、まち研全体の動向を概観することも可能になった。今後はまち研に掲示する紙のカレンダーとの連動によって、地域の方にもいつ、どんな活動を行っているか「見える化」できると、より効果的であると考ええる。

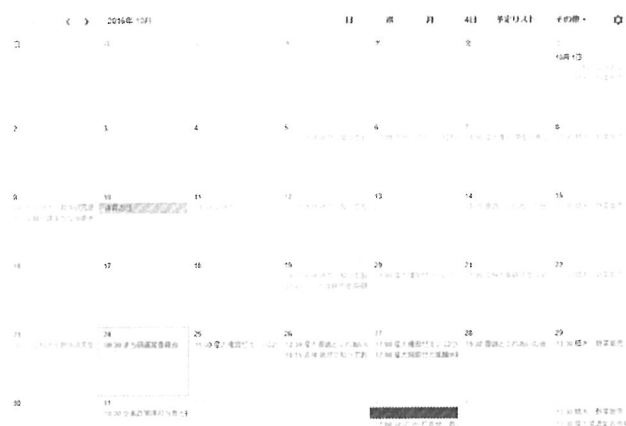


図2 Google カレンダーによるまち研使用状況の管理（平成 28 年 10 月）

多くの団体がそれぞれのアプローチでまち研を活用している現在の使用状況は、稼働率や参加学生数の向上といった側面からは喜ばしいことである。また、各種イベント等への地域の方々の参加人数の大幅増加、特にリピーターの増加は、まち研の認知度が影響していると思われ、まち研の活動に興味を持ってくださる方が増えていると理解できる。

しかし、その一方で、未だに「まち研は何をやっているところなのか」という声や、「もっと目立つようなことをやってみては」との意見を耳にすることがある。学生の興味関心、専門性に応じて「様々な」取り組みにチャレンジできることが、新たな運営体制によるまち研の強みであると考えるが、予算や参加者が個々の活動に分散することで、まち研を代表するようなダイナミックな活動やインパクトに欠けるとの印象もあるのだろう。今後は個々の活動を充実させる一方で、二大学の連携、協力の場面や、複数の事業のコラボレーションの視点などを積極的に取り入れ、「二大学連携」事業の特徴を活かし、より多くの地域の方に認知し、理解していただく工夫が必要であると考ええる。

新年度は新たに「U・I ターン情報プラザ」も活動の性格に応じてまち研のサテライトスペースとして随時活用させていただく予定である。今後も学生と地域の方々が楽しみながら共に高めあう場を目指して、まち研を大いに活用していきたい。